授業実践のまとめ

中学校道徳科　第２学年
主題名　誠実であること
内容項目　A－(1)　自主、自律、自由と責任
教材名「ネット将棋」（出典『私たちの道徳　中学校』文部科学省　発行）

1　主題設定の理由

誠実は、自己を確立するための主徳であると言われ、他の視点の多くの内容項目にも関わる価値です。中学校の段階では、様々な場面において競い合い、その中で自分を高めていく機会が多く、時には自身が望む結果にならないこともあり、過ちや失敗を経験しながら成長していきます。また、自己の行為やその結果、それらに関係する他者に対して誠実であることに気付くことを通して、自律的な生き方を確立していきます。自らを律し、自分や社会に対して常に誠実でなければならないことを自覚し、人間として誇りをもった、責任ある行動がとれるようになることが大切です。

教材においては、勝ち負けのみにこだわるあまり規範意識に欠け、自分を律することができなかったり、対戦相手や結果に対して不誠実であったりする「僕」に焦点化し、自律の精神を重んじ、人や物事に対して誠実であることの意義や価値を考えます。

指導に当たっては、人や物事に対して誠実であることに関して、教材の中から問題点を見いだし、その解決に向けた学習を行います。最終的には、教材から離れて自分の体験等を想起しながら、ねらいとする価値について多面的・多角的に考え、話し合う中で、人や物事に対して誠実であることに関して、自分なりの納得できる考えを導き出すことができるようにします。

2　本時の展開の概要

＜本時のねらい＞

人や物事に対して誠実であることの意義や価値に気付くことを通して、自己の行為やその結果に責任をもとうとする道徳的実践意欲と態度を育てる。

＜本時の展開＞

	学習活動	○主な発問　◎中心的な発問	◇指導上の留意点
導入	1　将棋の三礼について考える。	○　将棋の三礼に「負けました」というものがあります。「負けました」は、何のために言うのでしょうか。	◇　投了や感想戦など、将棋ならではの言葉やルールについて補足説明し、なぜ「負けました」と自ら宣言するのかを考えることができるようにする。
	2　教材の中から「僕」の行動の問題点を見いだす。	○　「僕」のどのようなところが気になりましたか（発問①）。	◇　「僕」に焦点化し、「僕」の行動のどのようなところが問題点と感じたかについて考えることができるようにする。
展開	3　問題点と感じた「僕」の行動の背景にある気持ちについて考える。	○　徹底的に時間稼ぎをしていた「僕」や、ネット将棋に戦意喪失し、黙ってコンピュータ画面を閉じた「僕」は、何を考えていたのでしょうか(発問②)。	◇　教材の場面を想起させながら、「僕」に共感し、その気持ちを考えることができるようにする。
		○　勝負に負けそうになったときに、投げやりになったり悔しがったりする「僕」の気持ちに、共感できますか(発問③)。	◇　生徒自身の体験等を想起させながら、自分の考えに最も近い意見に挙手をすることで、自分自身との関わりの中で考えることができるようにする。
	4　「僕」と「敏和」の違いを通して、人や物事に対して誠実であることの意義や価値について考える。	◎　「僕」と「敏和」には、どのような違いがあるのでしょうか(発問④)。	◇　「僕」の視点だけでなく、「敏和」の視点からも考えるように促すことで、人や物事に対して誠実であることに関して、多面的・多角的に考えることができるようにする。
	5　ねらいとする価値を、自分自身との関わりの中で考え、話し合う。	○　心から負けを認めることができる人で在るために、どのようなことを大切にしたいですか（発問⑤）。	◇　個人で考えたあと、周囲との話合いを促し、人間としての生き方についての考えを深めることができるようにする。発表を通じて全体で交流し、自分の考えを深めることができるようにする。
終末	6　本時の学習について、書く活動を通して振り返り、教師の説話を聞く。	○　今日の授業における気付きや感想を書きましょう。	◇　生徒が気付きや感想を書き、これからの生き方について考えるような自己内対話を終えたあとに、教師が説話をする。

☞「授業づくり FIRST STEP」　☞「学習指導プラン」

3　本時における学習指導過程と指導方法の工夫

道徳科の目標に示されている「自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習」を踏まえ、学習指導過程と指導方法の工夫について示します。なお、学習指導過程と指導方法の工夫については、以下に示す４つのポイントに沿って示していきます。

道徳科の目標に示されている学習を行うために、留意すべき４つのポイント
１：問題意識をもって授業に臨むことができるようにする。
２：自分自身との関わりの中で考えることができるようにする。
３：多面的・多角的に考えることができるようにする。
４：自己を振り返り、人間としての生き方についての考えを深めることができるようにする。

☞「授業づくり FIRST STEP」

１：問題意識をもって授業に臨むことができるようにする。

導入から展開のはじめの段階において、本時のねらいとする道徳的価値である「誠実」に焦点化を図りました。その際、生徒が教材の中に描かれている問題点を見いだすことができるように発問（**p.1 発問①**）したり、友達と問題点を共有する場を設定したりしました。また、問題点と感じた「僕」の行動の背景にある気持ちについて考えることで、生徒がねらいとする道徳的価値である「誠実」について考える必然性を高め、問題意識をもって授業に臨むことができるようにしました。

【教材の中から問題点を見いだすための発問】

「僕」のどのようなところが気になりましたか。

気になったところについて、近くの人と共有しましょう。

将棋の勝負に負けそうになって、時間稼ぎをするずるさがあるよね。

ネット将棋では、負けそうになるとコンピュータ画面を閉じているよ。

どうしてこういうことをするのだろうね。

資料1　教材の中に描かれている問題点を共有する生徒の様子

なるほど。「僕」のそういうところが気になったのですね。
では、そのようなことをしていたときの「僕」は、何を考えていたのでしょうか。

「負けたくない」や「悔しい」ということを考えていたと思います。

ネット将棋では「対戦相手が見えないからいいや」と考えていたのではないでしょうか。

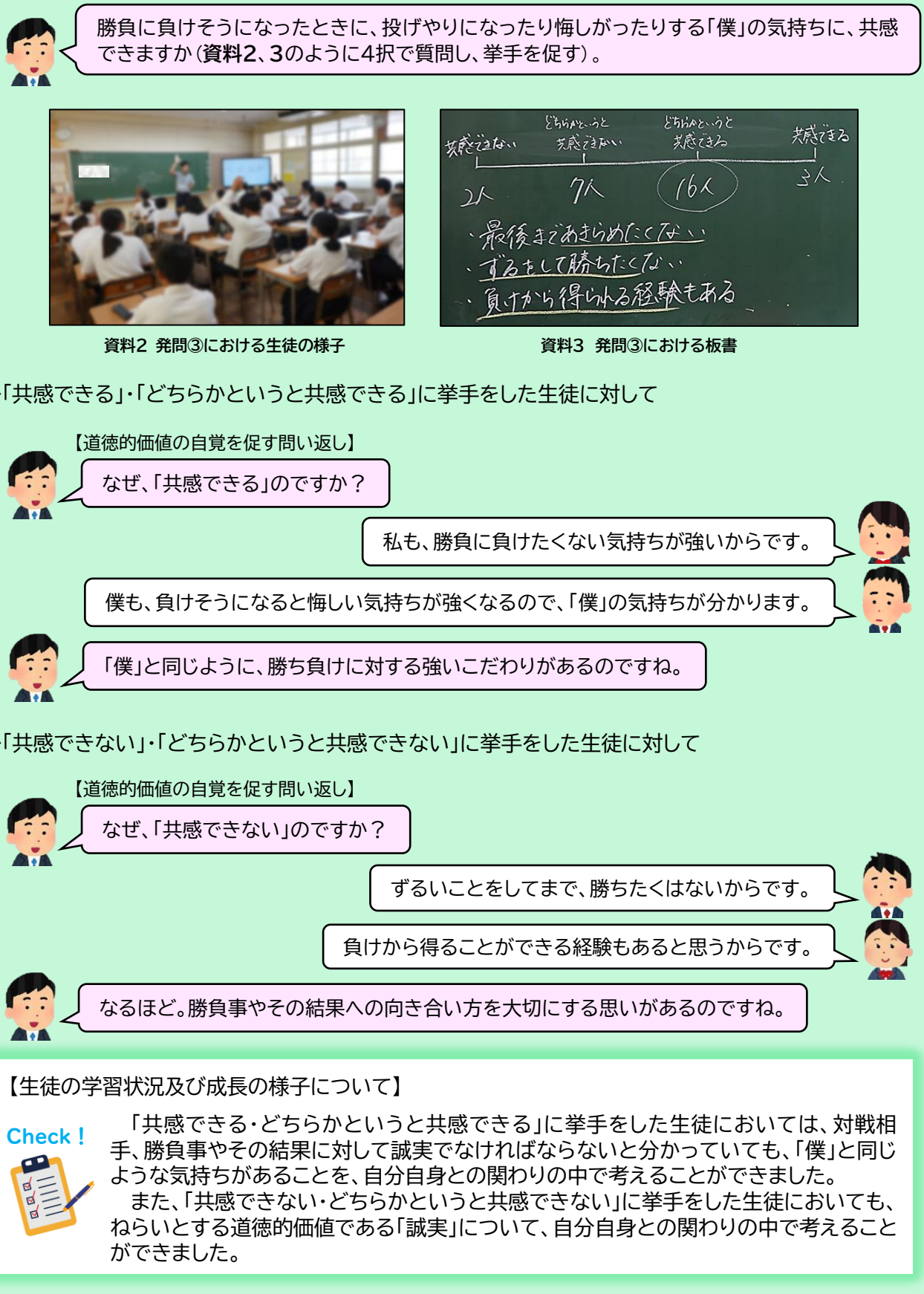
【生徒の学習状況及び成長の様子について】

Check！

教材の中に描かれている問題点を見いだし、互いに共有することで（**資料1**）、「僕」の不誠実さという道徳上の問題を把握することができました。また、誠実であることは大切だと分かっていながら、なかなか実現することができていない「僕」に共感し、その気持ちを考えることで、人や物事に対して誠実であることの意義や価値について考えるきっかけをつくり、問題意識をもって授業に臨むことができました。

２：自分自身との関わりの中で考えることができるようにする。

前項1の段階を経て、展開の中心的な発問に至る前の発問（**p.1 発問③**）において、教材の中で不誠実な様子が描かれている「僕」の気持ちに共感できるかどうかを問い掛けました。その際、発問に対して挙手をさせて終わるのではなく、生徒の考えを聞いたり問い返したりしていくことで、生徒がねらいとする道徳的価値である「誠実」について、自分自身との関わりの中で考え、道徳的価値の自覚を促すことができるようにしました。



勝負に負けそうになったときに、投げやりになったり悔しがったりする「僕」の気持ちに、共感できますか（**資料2、3**のように4択で質問し、挙手を促す）。

資料2　発問③における生徒の様子

資料3　発問③における板書

◆「共感できる」・「どちらかというと共感できる」に挙手をした生徒に対して

【道徳的価値の自覚を促す問い返し】

なぜ、「共感できる」のですか？

私も、勝負に負けたくない気持ちが強いからです。

僕も、負けそうになると悔しい気持ちが強くなるので、「僕」の気持ちが分かります。

「僕」と同じように、勝ち負けに対する強いこだわりがあるのですね。

◆「共感できない」・「どちらかというと共感できない」に挙手をした生徒に対して

【道徳的価値の自覚を促す問い返し】

なぜ、「共感できない」のですか？

ずるいことをしてまで、勝ちたくはないからです。

負けから得ることができる経験もあると思うからです。

なるほど。勝負事やその結果への向き合い方を大切にする思いがあるのですね。

【生徒の学習状況及び成長の様子について】

Check！

「共感できる・どちらかというと共感できる」に挙手をした生徒においては、対戦相手、勝負事やその結果に対して誠実でなければならないと分かっていても、「僕」と同じような気持ちがあることを、自分自身との関わりの中で考えることができました。

また、「共感できない・どちらかというと共感できない」に挙手をした生徒においても、ねらいとする道徳的価値である「誠実」について、自分自身との関わりの中で考えることができました。

３：多面的・多角的に考えることができるようにする。

ねらいとする道徳的価値である「誠実」について、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させていくために、「誠実であること」とはどのようなことかを具体的に考える必要があります。そのため、展開の段階の中心部分では、以下に示す中心的な発問（**p.1 発問④**）に対する生徒の考えにその都度問い返し、必要に応じて対話の場を設けることで、「誠実であること」とはどのようなことかを、多面的・多角的に考えることができるようにしました。

【中心的な発問】

「僕」と「敏和」には、どのような違いがあるのでしょうか。

◆ 自己の行為やその結果に対して、誠実であることを考える場面

「僕」は負けず嫌いですが、「敏和」はそうではありません。

【問い返し】

では「敏和」は、将棋において勝ちたい気持ちはないのでしょうか。

勝ちたい気持ちがない訳ではないと思いますが、負けたあとの行動が「僕」と「敏和」では違いがあります。

【問い返し】

どのように違うのでしょうか。

「敏和」は、なぜ負けたのかを考えて、その結果に向き合っています。

◆ 対戦相手に対して、誠実であることを考える場面

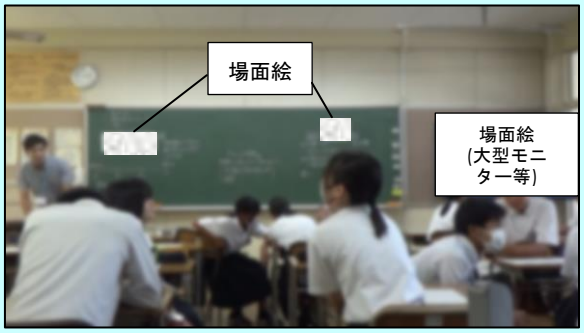
「敏和」は努力しているけれど、「僕」は努力していないと思います。

【問い返し】

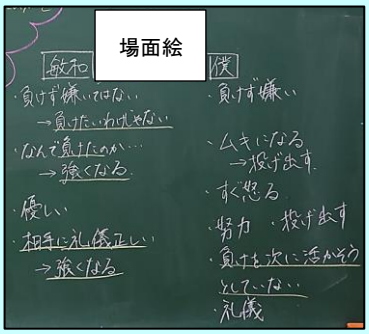
「僕」は努力していると思いますよ。休日の時間を費やしてネット将棋をしているのですから。

でも、「僕」は負けそうになるとすぐに投げ出します。相手への礼儀正しさがありません。

「敏和」は、自分の結果のことだけでなく、相手への礼儀についても考えています。



資料4　教師の問い返しに対して考える生徒の様子



資料5　発問④における板書

【生徒の学習状況及び成長の様子について】

Check！

生徒は発問や問い返しを通して、その都度生徒同士や教師と生徒との間で対話を深め、ねらいとする道徳的価値である「誠実」について考えを深めることができました（**資料4、5**）。このような学習活動を通して、対戦相手や結果、物事などに対して、誠実であることとはどのようなことなのかを、広い視野から多面的・多角的に考えることができ、誠実であることの意義や価値に、生徒自身が気付くことができました。

４：自己を振り返り、人間としての生き方についての考えを深めることができるようにする。

展開の段階の最後に、自己を振り返り、人間としての生き方についての考えを深めることができるようにするために、これまでの生き方やこれからの生き方を想起させるような発問（**p.1 発問⑤**）をし、話合いの場を設けました。この話合いによって、生徒が学んだ道徳的価値を手掛かりとして、自己を振り返り、人間としての生き方についての考えを深めることができるように、以下に示す①～③の学習活動を促しました。

① 発問に対して個人で考える（**資料6**）。
② 話合いをする。その際、話合いの中で感じたことや気付いたことをメモする（**資料7**）。
③ 話合いを通して深めた自分の考えをまとめ、学級全体で発表をする。

◆ ①及び②の学習活動について

心から負けを認めることができる人で在るために、どのようなことを大切にしたいですか。

資料6　発問に対して個人で考える生徒の様子

資料7　話合いをしたり、メモしたりする生徒の様子

◆ ③の学習活動について

話合いを通して、感じたことや考えたことを発表してください。

私は、勝負をしてくれる相手に対して、感謝の気持ちをもつことを大切にしたいです。そうすれば結果にも納得できると思います。

僕は、たとえ思うような結果にならなくても、相手への礼儀を大切にしたいです。

【道徳的価値を広げる問い返し】

相手への感謝や礼儀が大切だと考えたのですね。
二人の考えを聞いて、ほかの皆さんはどう思いましたか。

私は、どうしてそのような結果になったのか、自分自身が結果にしっかりと向き合うことを大切にしたいです。

僕は、相手に対して誠実であることを大切にしたいです。

【道徳的価値を深める問い返し】

「誠実であること」とは、どのようなことなのでしょうか。

私は、相手の真剣さに応えることだと思います。相手の真剣さに応えることは、相手への感謝や礼儀がないとできないからです。

【生徒の学習状況及び成長の様子について】

Check！

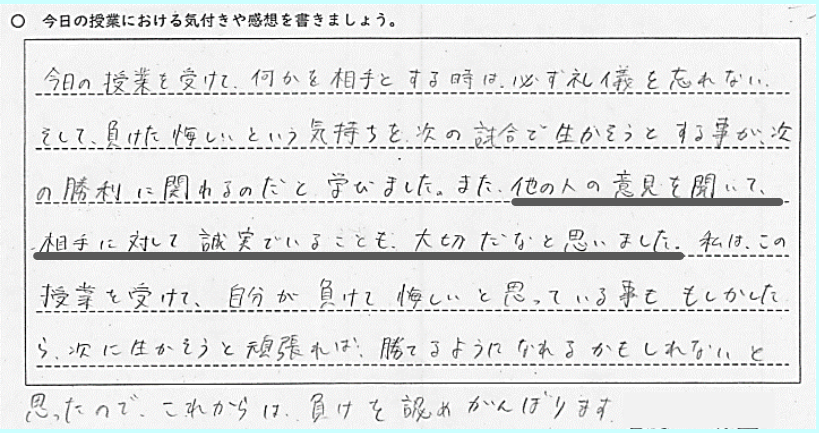
上記のやり取りのように、学んだ道徳的価値を手掛かりとして、自己を振り返り、これからの生き方についての考えを深めることができていることがうかがえました。また、学級全体での発表の中で、教師が道徳的価値を広げたり深めたりするような問い返しをしていくことで、生徒が、自分自身との関わりの中で道徳的価値を見つめ直し、ねらいとする道徳的価値である「誠実」についての見方や考え方、感じ方を深めていることがうかがえました。

展開の段階の最後において、学んだ道徳的価値を手掛かりに、人や物事に対して誠実であることに関して、自分なりの納得できる考えをもつことができました。

終末の段階においては、生徒が自ら考えを深めたり整理したりするために重要な役割をもつ書く活動を通して、本時の学習で学んだ道徳的価値を手掛かりに、自己を振り返り、人間としての生き方についての考えを深める時間を確保しました（**資料8**）。

今日の授業における気付きや感想を書きましょう。

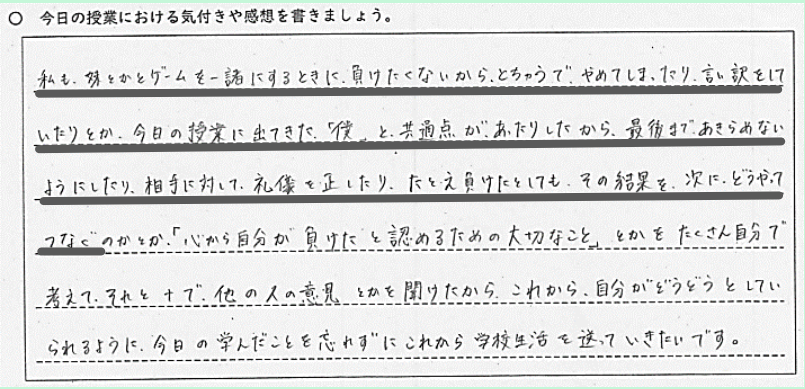
資料8　学んだ道徳的価値を手掛かりに、自己を振り返る生徒の様子



○　今日の授業における気付きや感想を書きましょう。

今日の授業を受けて、何かを相手とする時は、必ず礼儀を忘れない。そして、負けた悔しいという気持ちを次の試合で生かそうとする事が、次の勝利に関れるのだと学びました。また、他の人の意見を聞いて、相手に対して誠実でいることも、大切だなと思いました。私は、この授業を受けて、自分が負けて悔しいと思っている事ももしかしたら、次に生かそうと頑張れば、勝てるようになれるかもしれないと思ったので、これからは、負けを認めがんばります。

資料9　一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展していることが分かる生徒の記述（下線部）



○　今日の授業における気付きや感想を書きましょう。

私も、友とかとゲームを一緒にするときに、負けたくないから、とちゅうで、やめてしまったり、言い訳をしていたりとか、今日の授業に出てきた、「使」と、共通点があったりしたから、最後まであきらめないようにしたり、相手に対して、礼儀を正したり、たとえ負けたとしても、その結果を、次に、どうやってつなぐのかとか、「心から自分が負けたと認めるための大切なこと」とかをたくさん自分で考えて、それをもって、他の人の意見とかを聞けたから、これから、自分がどうどうとしていられるように、今日の学んだことを忘れずにこれから学校生活を送っていきたいです。

資料 10　道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めていることが分かる生徒の記述（下線部）

【生徒の学習状況及び成長の様子について】

Check！

資料9は、学んだ道徳的価値を手掛かりに、自分なりの考えとほかの人の考えを踏まえて記述しています。自分の行為による結果に目を向けて、これからの自己の生き方についての考えが深まっていることがうかがえました。

資料 10 の記述は、これまでの自分の体験や行為等を想起しながら、学んだ道徳的価値を手掛かりに、これからの自己の生き方についての考えが深まっていることがうかがえました。

4　道徳科の授業に対する評価

本主題における授業実践において、『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説特別の教科道徳編』に示されている学習指導過程や指導方法に関する評価の観点イ、オに沿って、学習指導過程や指導方法を評価しました。

『中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説　特別の教科　道徳編 pp.117-118』

観点イ	発問は、生徒が広い視野から多面的・多角的に考えることができる問い、道徳的価値を自分のこととして捉えることができる問いなど、指導の意図に基づいて的確になされていたか。

発問⑤における生徒とのやり取りの中で、生徒から「相手に対して誠実であること」というねらいとする道徳的価値についての見方や考え方、感じ方を深めている様子が確認できたので、「人や物事に対して誠実であるために、どのようなことを大切にしたいですか。」と問うなど、道徳的価値の意義を直接問うような発問に変更することも考えられました。そのような発問をすることで、主題である「誠実であること」に関して、より広い視野から多面的・多角的に考えることができるようになったのではないかと思います。

観点オ	ねらいとする道徳的価値についての理解を深めるための指導方法は、生徒の実態や発達段階にふさわしいものであったか。

教材の中から問題点を見いだし、その問題を自分自身との関わりの中で考え、議論していくという問題解決的な学習を取り入れたことで、生徒自らがねらいとする道徳的価値のよさを感じ取り、人間としての生き方についての考えを深めていくことにつなげることができたと考えます。

5　授業実践を終えて

本主題における授業実践に当たっては、人や物事に対して誠実であることの意義や価値について考え、自己の行為や結果に責任をもつという明確な指導の意図をもって計画を立て、授業の中で予想される生徒の学習状況を想定しました。その上で、道徳科の目標に示されている「自己を見つめ、物事を広い視野から多面的･多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習」を着実に行いました。そうすることで、生徒は、ねらいとする道徳的価値のよさを感じ取り、人間としての生き方についての考えを深めていくことができました。

一方で、授業実践の映像や生徒のワークシートを振り返ってみると、授業中に取り上げることができなかった、生徒のねらいとする道徳的価値に基づいた考えが多くあったことが分かりました。そのような生徒の多様な考えを授業の中に反映し、ねらいとする道徳的価値についての見方や考え方、感じ方をより一層深めていくために、他の教職員とのティーム・ティーチングなどによる協力的な指導を取り入れることの必要性も感じました。

また、教師自らの指導を評価することで、その評価を今後の指導に生かすことが、道徳性を養う指導の改善につながることも実感することができました。

道徳科は、教育の中核である道徳教育の要としての役割を担っています。生徒の内面的資質としての道徳性を高め、これからの生き方につなぐことができる価値ある教育活動であることを踏まえ、これからも道徳教育の充実に向けて授業づくりを行っていきたいと思います。